の結果と比較して，他害行為者や就労者の割合，精神保健福祉法の再入院率は同程度であった．

以上からさいがた病院を退院した入院処遇対象者は退院後の社会資源の利用が促進されており，概ね良好な予後であることが示唆された．しかし，さいがた病院を退院した症例のほとんどが統合失調症か気分障害であり，物質使用障害患者と比べ良好な予後が予想される群であったこと，調査期間が比較的短いこと，なども良好な予後が示唆された理由の一つかもしれない．医療観察法による医療の効果検証のためには，今後も継続的な調査が必要である．

4　Quetiapineが奏功した音楽幻聴の1例

北村　秀明

新潟大学医歯学総合病院精神科

音楽幻聴（musical hallucinations，以下MH）は古くから知られる特異な症候群で，最初の記述は18世紀中頃から19世紀初頭にさかのぼる．聴覚障害を持つ中高年の女性に多く，その内容は繰り返すリズムやメロディーである．音楽としては子供の頃に良く聞いた童謡，唱歌，懐かしの歌謡曲が多く，欧米では賛美歌・聖歌も主題となる．MHはときに治療抵抗性であるが，非定型抗精神病薬であるquetiapineが奏功した症例を経験したので，症例を報告し，MHの薬物療法を展望する．

症例は82歳の女性，加齢による難聴があった．X-1年12月頃から，頭の中で「うらら，うらら・・・」，「今日は病院の日だ，日だ・・・」とメロディーや言葉が反復するようになった．他院で治療を受けるも改善せず，X年11月に当院を受診した．主訴は「頭の中で始終，音楽が鳴り響いて辛い」であった．山本リンダの曲が一日中聞こえるほか，人の声とも機械の音ともつかない言葉が，メロディーに乗って聞こえ，自分が意識したことが言葉になって繰り返されることもあった．家族は認知機能の衰えを気にしたが，HDS-Rは28点，日常生活は自立していた．

副作用に注意しながら，一日25から50 mgのquetiapineの内服を漸増する初期診療計画を立てたが，初期のアドヒアランスは良くなかった．止むを得ず他の薬剤を試みたが，抑肝散，aripiprazole，olanzapineによるMHの改善は認めなかった．そこでX＋1年5月からquetiapineを再開，7月下旬までに150 mgに漸増した．するとMHが急速に改善し，8月には外出機会が増加，温泉旅行に行くことができた．頭の中で「えいやさ，えいやさ・・・」「あらら，あらら・・・」と同じ言葉の繰り返しがあったが，気にならなかった．X＋2年の5月にquetiapineを一時自己中断するとMHが再燃したが，quetiapineを再開するとすぐに減少した．X＋2年10月現在，MHは非常に少なく，日常生活への支障はない．当科を初診してから約2年，認知機能は緩徐に低下し，側頭葉を中心とした脳萎縮や血流低下もあるため，経過を注意深く観察している．

MHは聴覚皮質への聴覚入力の減弱が引き起こす解放現象と言われ，視覚障害を持つ人のCharles Bonnet症候群との近縁性が指摘されている．MHに対するdonepezilやSSRIの有効性と比較して，抗精神病薬については報告自体少なかったが，最近は比較的低用量のquetiapine奏功例の報告が増えている．Quetiapineの代謝性副作用等に十分注意すれば，quetiapineはMHに対する新たな治療オプションとなる可能性がある．

5　保育園年長児におけるADHD様行動と運動発達との関連について

稲月まどか

医療法人　白日会　黒川病院

【目的】新潟県下越地域では小児人口が減少する一方で，就学に際し援助や支援を有する子供の数は増えている．演者が各行政で行っている保育園巡回相談の現場でも年長児の行動は落ち着きがなく，衝動的で攻撃的な言動が多い．一方幼児健診の現場では，這い這いをせずにすぐ伝い歩きをする，早くから歩行器に入りあまり這い這いを

しないという子供が多く見られ，歩行の不安定さが長引く子供が多い．演者はH24年度から年長児の保育園における行動特徴を担任記入式の行動評価尺度を用いて把握し，発達支援の一環として保育に運動プログラムを導入し，その効果について経過を追跡している．今年度，保育園年長児の行動特性と運動能力，乳児期後期の運動発達について関連があるのか検討するため，保護者への発達歴聴取と年長初夏時点での足指の運動能力について調査したので報告したい．

【方法】対象は4市町村28園556名の年長児である．H25年5月時点でADHDRSIV J，多動性評価尺度の2尺度を用い一つ以上の尺度でカットオフポイントを超えた園児の延べ数を把握した．また園児一人一人に対し足指の運動能力をチェックし，点数化して行動特性との関連を調べた．保護者に這い這いや歩きに関する園児の乳児期後期の運動発達に関するアンケートを行い，這い這いの継続期間や歩行器の使用の有無と年長時点での行動特性との関連を調べた．

【結果】H25年5月時点でADHDRSIV J，多動性評価尺度の2尺度のカットオフポイントを超えた園児は延べ数で男児39.0％女児20.9％全体の31.1％であった．年長初夏時点での園児の足指の運動能力は足指を開く，足指をほかの指に乗せるといった項目が70％の園児で不可能だった．行動特徴との関連を見ると，行動評価尺度の得点が高い児は足指の運動能力調査で得点が低い傾向が認められ相関は有意だった．一方年長児が乳児期のとき這い這いの継続が2か月未満だった子供は全体の半数に及び，這い這いの継続期間は伝い歩きや歩行器を使用した群で有意に継続期間が短かった．また歩行器を使用した群の年長時点での行動評価尺度得点は有意に高かった．また這い這いの継続期間が長いほど年長時点での行動評価尺度得点は低く，両者間には有意な負の相関が認められた．

【結論】幼児の行動特徴の背景には児の運動発達や実行機能の発達など様々な要因が関係している．幼児期の運動発達の根幹は歩行動作の完成であるが，児の発達上の特性や環境要因により歩行動作が完成せず，足指の運動能力の発達が不十分な幼児が行動特性として多動，落ち着きなさなどを示している可能性がある．乳児期後期の運動発達特に這い這いの継続期間は幼児の運動発達や行動特性と関連しており，こうした運動能力の発達を促すことが行動特性の変容に関与する可能性が示唆された．

6 新潟大学学生メンタルヘルス検診7年間の検証

七里 佳代・澁谷 雅子・村山 賢一

新潟大学保健管理センター

【はじめに】新潟大学保健管理センターでは，平成18年度より，学生定期健康診断の際に，全学部の学生と大学院生約13,000名を対象に，任意で「新潟大学メンタルヘルス検診」を実施している．DSMの気分障害の診断基準に基づいて作成された＜メンタルヘルス検診票＞による一次検診を実施した後，要精査者をメール通知で呼び出し，＜臨床面接＞による二次検診においてDSM-IV-TRに基づく診断を行っている．メンタルヘルス検診7年間の検診実態と精神保健活動との連関をまとめ，その有用性を検証する．

【方法】メンタルヘルス検診結果から，7年間の受検者数，有所見者数等を調査した．また，精神保健相談の記録や，学務情報等を基に，検診導入7年前の平成11年度から導入7年後の平成24年度までの精神保健相談の利用件数，自殺者等のデータを収集した．

【結果】一次検診受検者数は，検診を開始した平成18年度には5,622名（42.9％）であったが，検診開始7年後の平成24年度には9,992名（79.1％）に増加した．一次検診受検者のうち，二次検診の臨床面接を経て精神疾患を認めた者は54～131名（1.0～2.3％）で推移した．平成24年度の有所見者は103名であり，適応障害（50.5％），気分障害（31.1％），不安障害（5.8％）の順に多かった．平成24年度の二次検診受検者は119名であり，事後措置の結果は要治療が30.3％，要指導が61.3％，問題なしが8.4％であ